

II 近世「松江」に見られる歴史的風致

（1）城下町の造営と構造

松江城は、『松江市史 別編1 松江城』（2018松江市）によると、慶長12年（1607）ごろに築城が始められ、同16年（1611）に完成したと考えられている。

松江城が築かれた丘陵は「亀田山」または「極楽寺山」とも呼ばれる低丘陵地で、戦国時代に末次城が置かれたほか、極楽寺、法眼寺、若宮八幡宮、須衛都久神社、春日大明神、稲荷神社などの寺社があった場所である。

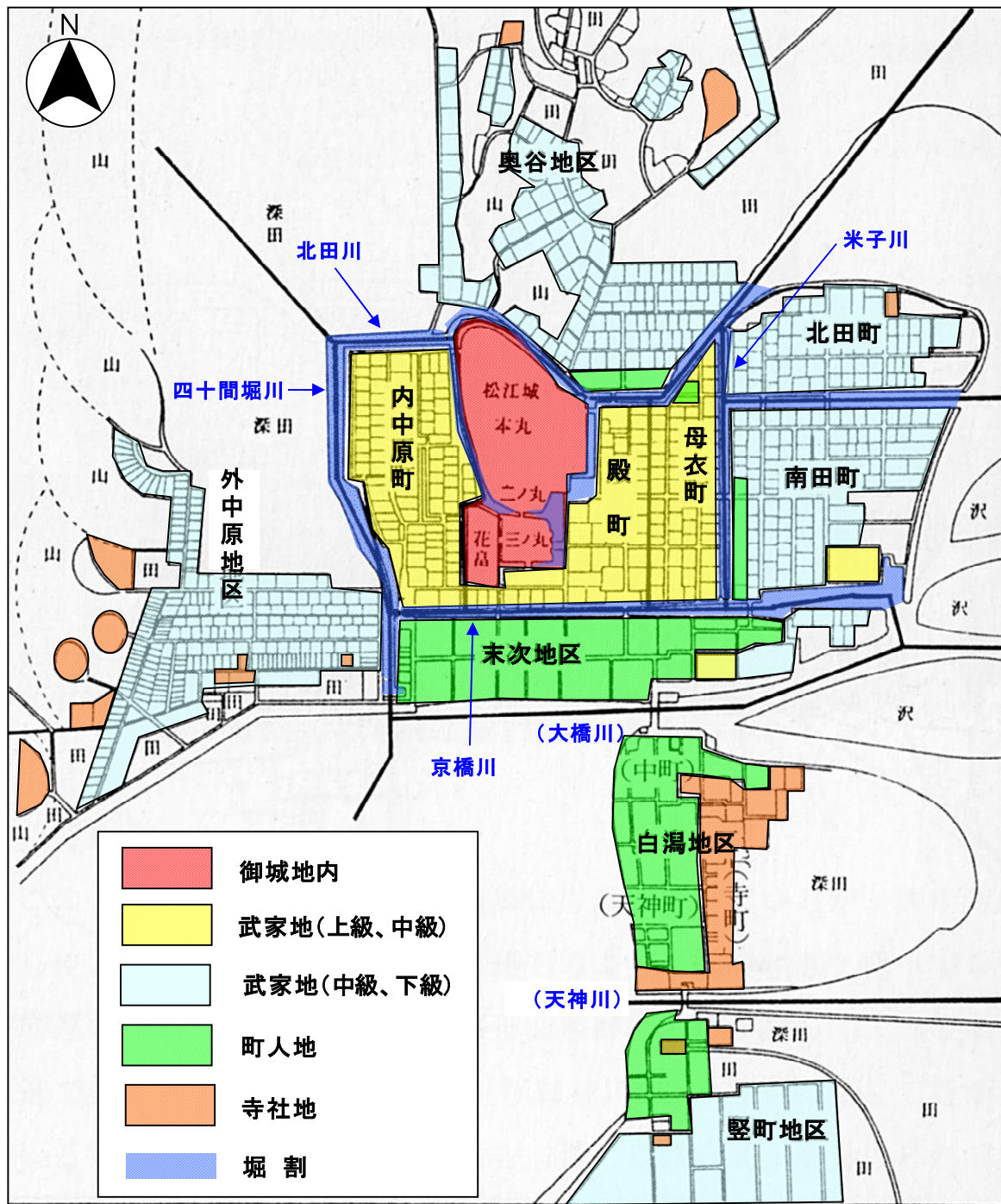
城下町が造られた宍道湖畔の様子は、「末次」と「白潟」と呼ばれる集落が存在するほかは、水田や湖沼が広がる地形であった。

近世城下町としての基盤を持たない場所に造られた城下町は、新たな都市計画に基づく都市であった。島根大学附属図書館所蔵の『堀尾期松江城下町絵図』は、寛永5年（1628）から寛永10年（1633）のあいだに書かれた絵図とされ、現存する松江城下町絵図では最も古く、かつ城下町完成当時の様子を克明に表している。絵図から読み取れる城下町の構造は、堀の配置や道路網、家臣の屋敷配置などに実際の戦を想定した合理的、計画的な城下町であることが分かる。

城下町の構造は、宍道湖と中海をつなぐ大橋川を挟んだ南北で大きく異なる。大橋川北側の地域は城郭を中心として堀割がなされ、それを囲むように武家地と町人地が配置されている。一方、大橋川南側の地域では、堀割は無いが、大橋川と天神川で挟まれた地域に町人地と寺院地、天神川の南側には武家地が整然と配置され、実戦的かつ機能的な構造となっている。



堀尾期松江城下町絵図



堀尾期松江城下町絵図概念図

（2）松江城城郭

大橋川北側地域で中心となる城郭は、標高 29m の亀田山丘陵の南端を切削し、南北 600m、東西 350m の独立丘陵に造成して本丸と二之丸を配置し、本丸最高所に五層六階の天守を築いている。これらを内堀で囲んだうえでさらに南方に堀で囲んだ南北 150m、東西 150m の正方形の敷地を造成して三之丸とし、御殿が置かれた。



史跡松江城

（3）武家地

大橋川北側の城下の屋敷配置は、城郭を中心として主に武家地で構成されている。城郭直近の周辺には重臣、上級～中級武士の武家地を配置している。「内山下」と呼ばれる区域は、現在の殿町、母衣町、内中原町に当たり、外堀で囲まれている。なかでも城郭に隣接した東側の区画には、江戸時代を通じて重臣クラスの屋敷地が置かれた。

松平氏の治世時代に代々家老を務めた朝日家もその一つで、天保 13 年(1842)の祈祷札から、江戸時代後期の創建と推定される「松江藩家老朝日家長屋」(市指定有形文化財)が現在も残されている。

町人地を挟んで更に東側、現在の南田町から北田町にかけての地域にも武家地を配置するが、城下町の最東端とも言える場所には堀尾氏重臣の屋敷が配置された。これは東に広がる湖沼地に面した位置を軍事的に固め、出城的な役割を持たせる意図があったもので、堀尾氏以降、京極氏、松平氏の時代にもこの場所には有力な家臣の屋敷が配置されている。

外堀を挟んで北側と西側の地域にも武家地が配置された。城郭の北側は内堀と外堀を兼ねた堀割となっているが、その北側にも武家地が置かれ、塩見縄手

と呼ばれる堀端の道路沿いには現在も「武家屋敷」（市指定有形文化財）が残されている。

外堀はいずれも城下町の造成に併せてともに掘削されたもので、城郭を中心にほぼ方形に形成されている。外堀にあたる現在の河川は、南側が京橋川、東側が米子川、北側が北田川、西側が四十間堀川であり、往時の形態を今も良く留めている。



松江藩家老朝日家長屋（市指定有形文化財）



塩見 畷旧武家屋敷遺構（市指定有形文化財）

（４）町人地

町人地は外堀を挟んで東側と南側、北東部にはコの字型に取り囲むように配置されている。

近年の発掘調査の結果、東側の外堀（米子川）に沿って位置する町人地（米子町）では、生活雑器などの多量の遺物に混じって墨壺や錐が発見されるなど、職人たちが居住していた様子を裏付ける資料が発見されている。南側の外堀（京橋川）沿い、現在の末次町～東本町にかけての区域にも町人地が置かれ、当時の細長い町割は現在も良く残っているほか、近年まで漁師町、大工町、鍛冶町、材木町という職人町の名残りを留める町名が使われていた。また北側の地域は、江戸時代の中頃に城地が拡張され、町人地が形成されている。

（５）寺社地

城下町の縁辺部には寺院が配置された。これは防御を固めるための意図であったと考えられており、北方に千手院、桐岳寺など、西方に大雄寺、清光院、愛宕神社などが置かれた。また、忠光寺の置かれた場所は、松平期には菩提寺としての月照寺（史跡松江藩主松平家墓所）が置かれた。



史跡松江藩主松平家墓所



清光院



大雄寺

大橋川南側の城下の屋敷配置は、大橋川と天神川に挟まれた地域に町人地と寺院地が置かれた。特に寺院地では堀尾氏が広瀬町の富田城から移した寺を含めて21カ寺が置かれた。これは、地形的に見てこの場所が松江城への侵入路として最も可能性の高い方角であり、東方ないし南方から攻めてくる敵に対する防衛陣地や、出陣の際に軍勢を整えるための陣地としても使えるように計画されたものと考えられている。寺院の広大な土地は現在でも閑静な寺町を形成している。また町人地が置かれた地区では、小路に取り付いた細い町割が現在も見られる。



宗泉寺、常栄寺、龍覚寺



明宗寺



町中に残る小路

（6）足軽屋敷

天神川を挟んで南側は雑賀衆（足軽）が配置された地域である。

しかし、絵図に記載された東西に長い屋敷割は、現在の南北に長い屋敷割と異なるもので、松平期の絵図とは整合が見られる。最近の研究成果によると、堀尾氏から京極氏の治世には、まだ都市計画された段階に留まっており、実際に足軽屋敷が置かれるようになったのは、松平氏の治世に入ってからであることが判明している。

松平期に入ってから形成された碁盤目状の方形区画のなかには更に短冊状に区画された町割が良く残っている。江戸時代の区画は間口5間（約9.1m）、奥行き15間（約27.3m）の75坪（約248㎡）の敷地でほぼ統一され、20区画で1街区を形成している。現在でも板塀と門構えの屋敷が多く見られる。

（7）松江藩主堀尾家ゆかりの地

南の丘陵地沿い（現在の^{さかえまち}栄町周辺）には堀尾家の菩提寺である^{えんじょうじ}圓成寺や、堀尾氏が松江移城の際に富田から移された^{とうこうじ}洞光寺がある。また丘陵頂部の^{しょうぎさん}床几山は、堀尾吉晴と忠氏が松江を展望しながら城地の選定を行ったと伝えられる場所であり、現在でも市街地が広く展望できる。



^{えんじょうじ}
圓成寺



史跡松江藩主
^{ほりおただはる}
堀尾忠晴墓所



^{とうこうじ}
洞光寺



通りに残る井戸



^{しょうぎさん}
床几山（城地選定の地）



^{めづき}
売豆紀神社

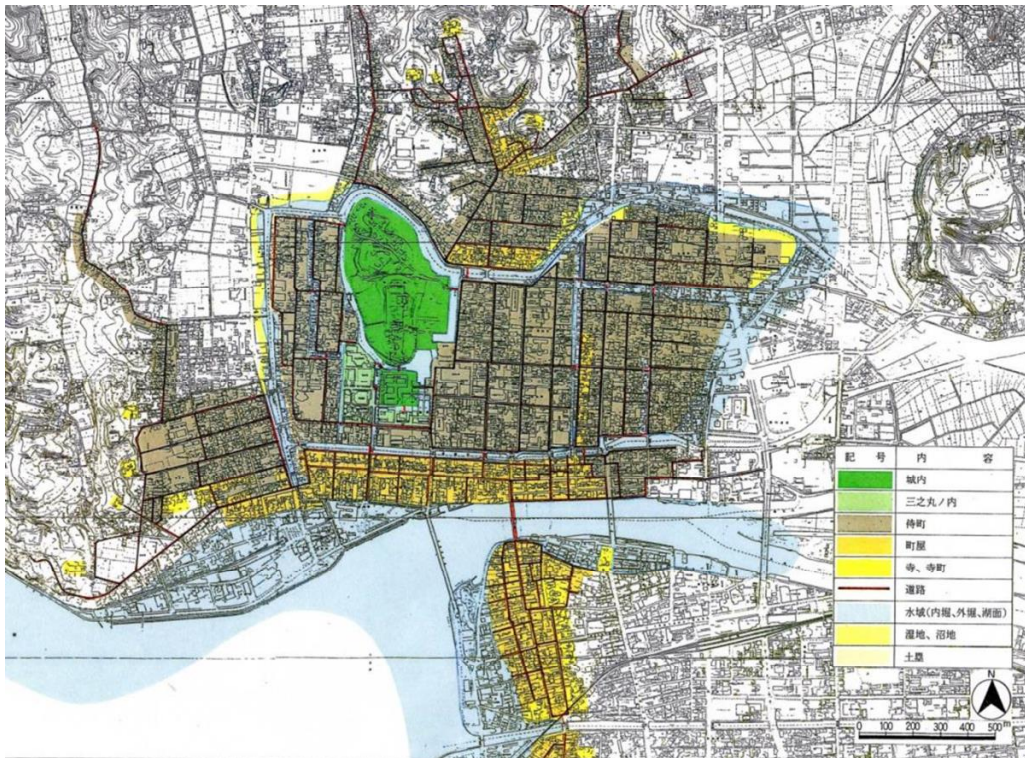


門構えのある和風建築

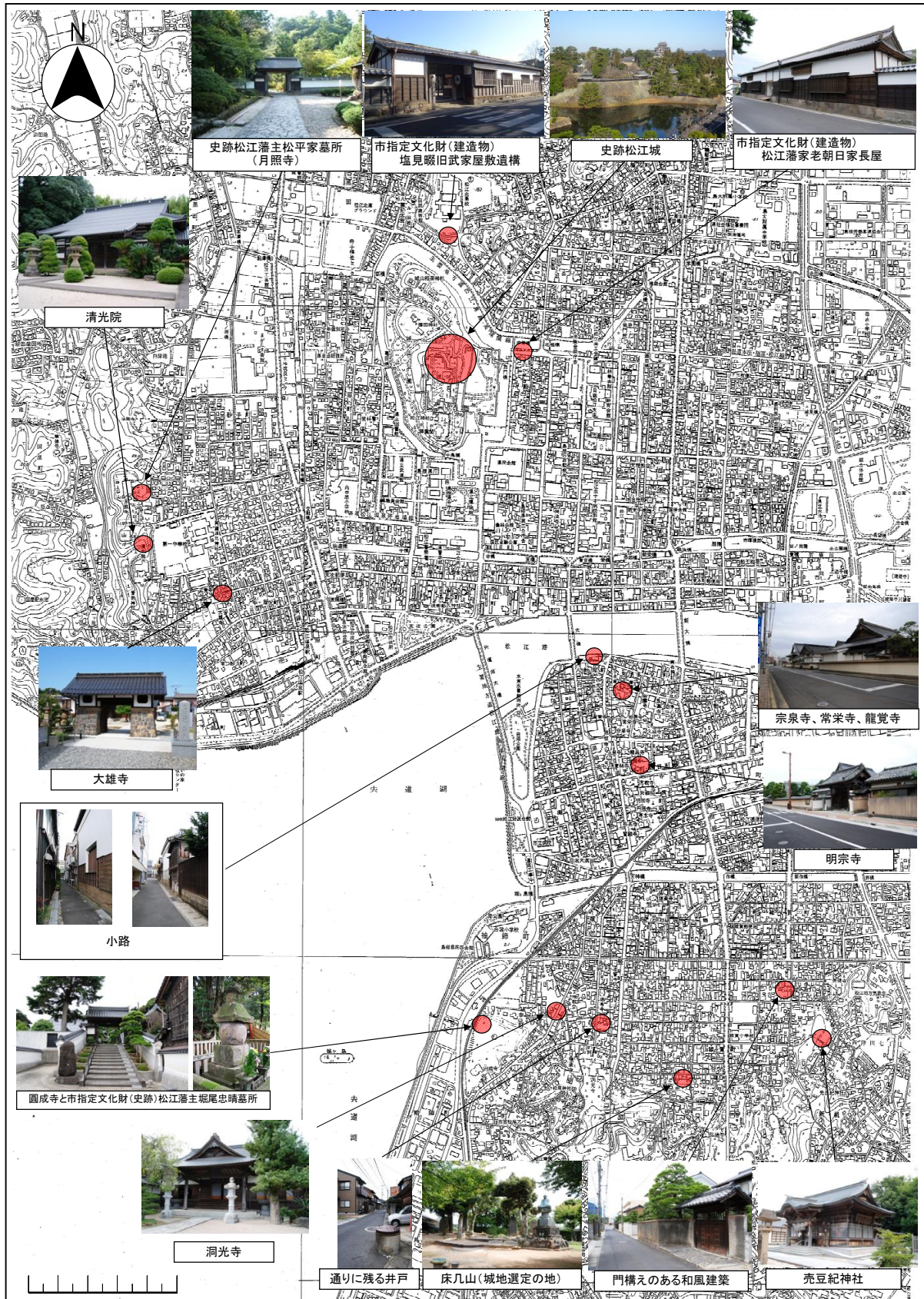
江戸時代の城下町の構造は、堀割やまちなみ、道路の形状として今も色濃く残っており、そこに伝わる伝統的な祭礼行事や工芸などの人々の活動と相まって城下町松江の“松江らしさ”を醸し出している。



松江城正保年間絵図(松江市指定有形文化財)



松江城正保年間絵図と現代地図との比較



歴史的建造物の位置(文中で紹介したもの)

1. ホーランエンヤに見られる歴史的風致

1 はじめに

(1) ホーランエンヤの概要

ホーランエンヤは、松江市殿町の史跡松江城区域内にある「城山稲荷神社」の神霊を約10km離れた松江市東出雲町出雲郷にある「阿太加夜神社（芦高神社）」まで船で運び、1週間にわたって豊作や繁栄などを祈り、再び城山稲荷神社まで戻ってくる「式年神幸祭」で、一般には權伝馬船を漕ぐ掛け声から「ホーランエンヤ」と呼ばれており、船上で披露される權伝馬踊りは市指定無形民俗文化財である。權伝馬船と權伝馬踊りは「五大地」と呼ばれる5つの地区で受け継がれている。現在は10年に1度の間隔で開催されている。

(2) ホーランエンヤの起源

ホーランエンヤの起源は、『御城内稲荷御社御神供料宝記』（弘化4年（1847）城山稲荷神社所蔵）によると、松江藩松平家初代直政が出雲に入国して10年目の慶安元年（1648）、松江藩が天候不順で凶作に見舞われたおりに、築城時から代々信仰が厚かった阿太加夜神社へ城山稲荷神社の神霊を運んで祈願したことに始まり、以後10年置きに執り行われていることが記されている。

(3) ホーランエンヤの変遷

神事が始まった初期の様子を知る資料は現在までに発見されていないが、当初は今日のような大船団による行列ではなかったようである。

しかし安政5年（1858）の『御祈願所芦高大社江御城内稲荷大明神御船ニ而御神幸并御祈禱之次第略記』には「大根嶋中と印し、八拾八番目迄、一行ニ引行」と見られるので、このころには多数の引き船で神船を引いていた様子が判り、明治3年（1870）の絵図『御城内稲荷大明神芦高社江十二年目神幸図』では船団の様子が記載されている。

回数	実施確認年号	備考
第1回	1648 慶安元年	
第2回	1658 万治元年	
第3回		実施未確認
第4回		実施未確認
第5回		実施未確認
第6回		実施未確認
第7回		実施未確認
第8回		実施未確認
第9回		実施未確認
第10回		実施未確認
第11回		実施未確認
第12回	1760 宝暦10年	
第13回		実施未確認
第14回		実施未確認
第15回		実施未確認
第16回		実施未確認
第17回	1808 文化5年	馬潟漁師、神輿船の難を救う。曳船の始まり。
第18回	1818 文政元年	矢田（朝酌）初参加。
第19回	1828 文政11年	大井 初参加。
第20回	1838 天保9年	福富 初参加。
第21回	1848 嘉永元年	大海崎 初参加。 權伝馬踊り始まる。
第22回	1859 安政6年	
第23回	1870 明治3年	
第24回	1881 明治14年	
第25回	1892 明治25年	
第26回	1903 明治36年	
第27回	1915 大正4年	
第28回	1929 昭和4年	
第29回	1948 昭和23年	
第30回	1958 昭和33年	
第31回	1969 昭和44年	
第32回	1985 昭和60年	
第33回	1997 平成9年	
第34回	2009 平成21年	10年に1度の開催となる
第35回	2019 令和元年	

現在のような五大地（馬潟地区、矢田地区、大井地区、福富地区、大海崎地区）で權伝馬船が出されるようになった経緯は、明治36年（1903）の『權天間起元取調事項』（城山稻荷神社所蔵）によると、文化年中（文化5年（1808）推定）の神事のおりに、暴風雨に遭った神輿船を馬潟村の漁師たちが助け、阿太加夜神社まで無事に送り届けたことに始まるとされ、以来、矢田、大井、福富、大海崎の各地区が順次加わったことが記されている。

また、權伝馬踊りや祭礼の様式は、江戸時代に越後国周辺で盛んに行われていたものが弘化年間（1844～1847年）に伝わり、当時流行っていた歌舞伎の要素も加わって今日のような華やかな船神事になったとされている。權伝馬踊りについては、島根郡加賀村（現在の松江市島根町加賀）の栄徳丸の船頭重蔵が越後地方で習い覚えたものを、弘化5年（1848）に馬潟に来船したときに伝授し、そのあと各地区で研究錬磨して代々傳承されたという。

元来、神幸祭という比較的シンプルな神事であったものに、權伝馬踊りという民俗芸能が付け加わったことで、華美化・大規模化していったのが今に見るホーランエンヤである。

2 建造物

（1）松江城

①史跡松江城

『松江市史 別編1 松江城』（2018松江市）によると、慶長12年（1607）ごろに築城が始められ、同16年（1611）に完成したと考えられている。

松江開府の祖堀尾吉晴によって築かれた。宍道湖畔の標高29mの亀田山を城地とする平山城で、国宝松江城天守がある本丸を中心に二之丸、二之丸下ノ段のほか多数の曲輪で構成される。

石垣・堀などは旧態を残し、山陰地方における近世城郭の代表的なものであり、昭和9年（1934）に城域が史跡指定されている。史跡内には、松江神社や興雲閣（島根県指定有形文化財）などの建物も存在する。



史跡松江城

② 国宝松江城天守

松江城は、関ヶ原の戦いの功績により、慶長5年（1600）出雲・隠岐二国の領主となった堀尾氏により築城された。堀尾氏は当初、安来市広瀬町の月山にあった富田城に入城するが、松江の地に新たな城と城下町の建設を決意し、堀尾吉晴により慶長12年（1607）ごろに築城が始められ、同16年（1611）に完成したと考えられている。

天守は4重5階地下1階の構造で、特色として、2階分を貫く96本の「通し柱」を効果的に配置すると同時に、上階の荷重を直接受けず、外側にずらしながら荷重を下に伝える構造になっている。南側に附櫓を設けた複合式望楼型天守に分類される。高さ約30m、外観は東西の大破風が目を引き、別名「千鳥城」とも呼ばれる。

明治の廃城令により取り壊しの危機に瀕したが、旧藩士や地元有志の奔走によって守られ今に伝えられている。

平成24年（2012）に「慶長拾六年正月吉日」などの文字が墨書きされた2枚の祈祷札が松江神社で見つかり、これにより完成が慶長16年（1611）正月以前であることが確定し、平成27年（2015）7月8日に国宝指定された。



国宝松江城天守

（2）城山稲荷神社

城山稲荷神社は、松江城の本丸北側に位置する神社である。寛永15年（1638）に出雲国に入国した松江藩松平家初代藩主直政（治世1638～1666）は、稲荷信仰に厚く、夢枕に旧領地の信州松本から憑いて来た稲荷神が現われたことをきっかけに勧請して小祠に祀ったのが始まりで、万治2年（1659）に社殿を造営

した。現在の本殿は、文化9年（1812）建築の棟札が残る。

以来、松平家の守護として崇拝された。ホーランエンヤにおいて「渡御祭」では本神社から神輿の行列が発し、「還御祭」では、境内で權伝馬踊りも奉納される。



城山稲荷神社 本殿



城山稲荷神社 鳥居

（3）阿太加夜神社

阿太加夜神社も松江城に縁の深い神社である。阿太加夜神社は、『出雲国風土記』（733）にも記載のある神社で、「芦高神社」とも呼ばれ、代々松岡家により神職が継承されている。社殿は元禄8年（1695）の造営で代々藩主による修造の棟札が残る。境内には、明治34年（1901）以降の本殿等社殿改造（正遷座祭）の記録が刻まれた石碑が安置されていた。

松江城の築城の際、本丸の南東角の石垣が何度も崩れて工事が進まなくなつたときに、諸々の社寺の祈祷を受けても良い験（効き目）が無かつたところ、当時効験の誉れが高かつた阿太加夜神社の神主松岡兵庫頭に祈祷を依頼したところ、無事工事が進んだ。これを契機にして、本丸の天守南東角の石垣上に建てられた2階建ての櫓が祈祷所（祈祷櫓）とされ、以来神主の松岡家が松江城の神主職を兼ねることになった。こうして松江城と城山稲荷神社、阿太加夜神社は深いつながりが生まれ、凶作のおりに阿太加夜神社へ城山稲荷神社の神霊を運んで祈願することになったと考えられる。ホーランエンヤでは、阿太加夜神社で「中日祭」が行われ、このときに使われる「陸船」と呼ばれる車輪が付いた權伝馬船は、ここの境内に保管され、氏子たちによって管理されている。



あだかや 阿太加夜神社 本殿



松江城天守南東角の石垣
あだかや 阿太加夜神社の祈禱により崩落がおさまった



あだかや 阿太加夜神社境内に保管される各地区の陸船（左からやだ・おおい・まかた・おおみぎき・みくとみ）

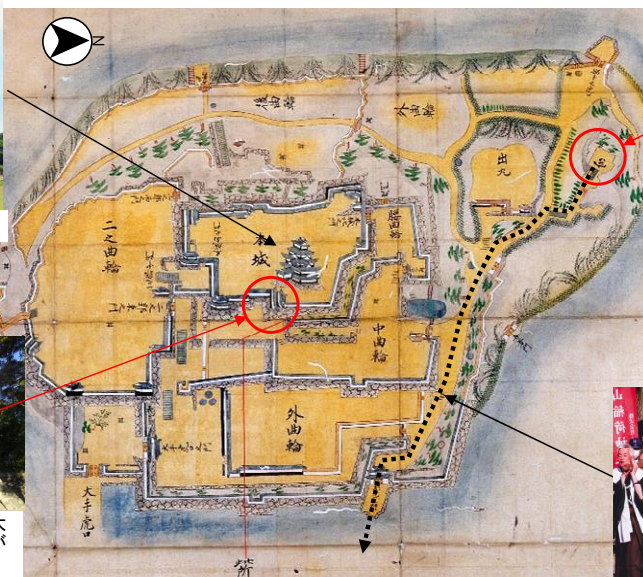
松江城城郭内のホーランエンヤに関する建造物等の位置



国宝松江城天守



幾度も崩れた石垣の上には阿太加夜神社の神霊を祈禱する槽が建てられた(祈禱槽)



元文3(1738)年松江城城郭図



城山稲荷神社



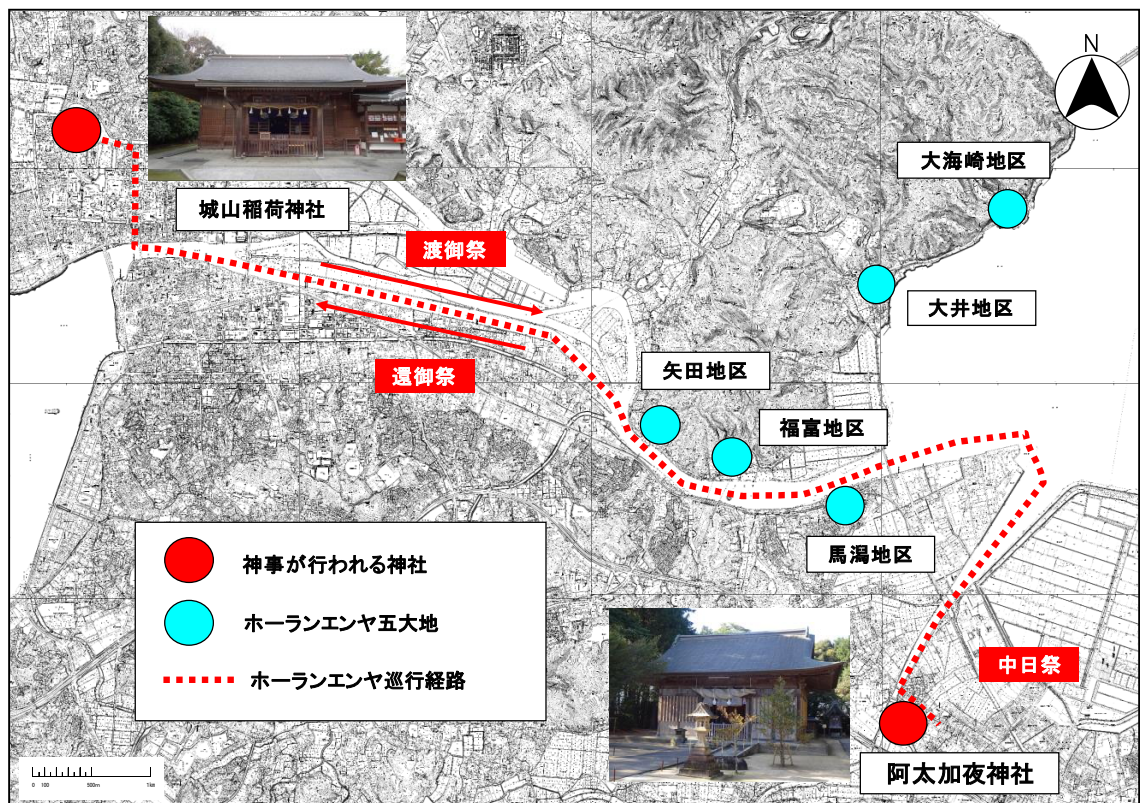
城山稲荷神社に奉納される
権伝馬踊り



城山稲荷神社から城内の道を通して神輿の行列が進む。還御祭では同じルートを神社へ向かう。

3 活 動

令和元年（2019）に行われたホーランエンヤでは、5月18日（土）に松江城山の城山稲荷神社から東出雲町の阿太加夜神社まで船行列で神霊を送る「渡御祭」、5月22日（水）に阿太加夜神社で「中日祭」、5月26日（日）に阿太加夜神社から城山稲荷神社まで戻る「還御祭」が行われた。



ホーランエンヤ巡行図



神幸之図概略(明治3年(1870))

(1) 渡御祭（5月18日）

a) 城山稲荷神社での祭礼

- ・まず城山稲荷神社で祭礼があり、神霊がうつされた神輿を担いで神社を出発する。神職一行は陸路で神輿船（大橋川の松江大橋北詰棧橋で待機）へ向かう。

b) 陸行列

- ・行列は神職と先祓役の鬼2人が先頭に立ち、神輿の前後は数々の神器などを持った多くの人からなる。
- ・陸行列は城山稲荷神社の崇敬者からなる初午講（北堀・新橋・北殿の3つの講中）の講員がつとめる。
- ・城山稲荷神社から脇虎口わきこぐちをおきって北惣門きたそうもん橋ぼしまでのルートは、本丸北側から北東へ向かう江戸時代からの道で、松江城の石垣を横に見ながら進む。脇虎口には江戸時代には櫓門やぐらもんがあった。門は現存しないが、枡形ますがたの虎口石垣が往時の様子をしのばせている。
- ・虎口を出ると「北惣門橋」を渡って城の外に出る。この橋は、平成6年（1994）に発掘調査成果と絵図資料を基に復原され、令和4年に改架された木橋で、城山の景観上も重要な橋である。昭和33年（1958）開催のホーランエンヤまではこの北惣門橋付近から船に乗り込み、權伝馬船かいでんませんと共に内堀を通り、京橋川きょうばし（外堀）から大橋川に出ていたが、堀川の水深が浅くなったことなどから、昭和44年（1969）開催時以降は大橋北詰めまで陸路で行き、そこから乗船するルートとなっている。
- ・陸路の行列は、「内山下」と呼ばれた外堀の内側に位置する上級武家屋敷の存在したまちなかをたどって大橋川に向かう。



城山稲荷神社を出発する陸行列



神輿行列の陸行



北惣門橋

c) 大橋川でのかいでん 馬ま踊り

- ・神輿船は、大橋川に架かる松江大橋北詰に設けられた棧橋付近で待ち構えている。
- ・陸行列が棧橋に到着すると、神輿は、神輿船に遷される。
- ・神輿船は、阿太加夜神社の氏子である「一向（講中）」の船に曳かれて棧橋を離れて大橋川の水面に浮かぶ。
- ・誘導船のあとに清目船が続き、阿太加夜神社氏子船に前後を挟まれる形で、権伝馬船の五番船の「大海崎権伝馬船」、四番船の「福富権伝馬船」、三番船の「大井権伝馬船」、二番船の「矢田権伝馬船」、一番船の「馬潟権伝馬船」が続き、神輿船周りの水域一帯を周回しながら権伝馬踊りが披露される。
- ・「ホーランエンヤ」の掛け声（唄）とお囃子に合わせて「剣権」と「采振」がそれぞれ権伝馬踊りを踊りながら船行列が大橋川を下って行く。
- ・そのあとには神器船や神楽船、神輿を載せた神輿船、城山稻荷神社の総代船などが続く。
- ・令和元年（2019）の船団の総数は、神輿船1隻、権伝馬船5隻のほか、誘導船、城山稻荷神社と阿太加夜神社の氏子船、連絡船や警備船などで合計125隻にも上った。
- ・令和元年（2019）のそれぞれの権伝馬船には、総指揮官の伝馬長、副伝馬長、舵取りの練権（臚権）、水先、調子を取る音頭取り、男踊りの剣権、女踊りの采振、お囃子の太鼓、権を漕ぐ権方の総勢37～53名が乗り込んだ。
- ・権伝馬船は、大橋川に架かる4つの橋（宍道湖大橋、松江大橋、松江新大橋、くにびき大橋）の間の3ヶ所の水場で、神輿船を囲んで唄いや踊りを披露しながら2～3回ずつ周回する。川の両側と橋の上は見物人で埋め尽くされる。
- ・権伝馬船が橋の下をくぐる際に、宝珠柱など高いポール類を倒す「ぼんぼり倒し」もひとつの見せ場である。



出発を待つ五大地のかいでん 馬ません
（左から）馬潟まかた権伝馬船・矢田やだ権伝馬船・大井おおい権伝馬船・福富ふくとみ権伝馬船・大海崎おおいざき権伝馬船



かいでん 馬ません
権伝馬船上の様子



男踊りの「けんがい 剣権」



女踊りの「さいふり采振」



お囃子の「たいこ太鼓」



権伝馬船と100隻を超える船団が参加する



馬潟権伝馬船と船団



橋の下をくぐり、ほうじゅぼしら宝珠柱（ぼんぼり）を上げる



大橋川で神輿船の周りを周回しながら唄と踊りを披露するかいでん 權伝馬船ません

d) 阿太加夜神社へ到着

- ・ 船団は大橋川を下り、中海に出て意宇川河口から川を登り、阿太加夜神社近くの出雲郷橋付近の意宇川で再度權伝馬踊りを披露する。
- ・ 馬潟權伝馬船に曳かれて神輿船は着岸上陸したのち、阿太加夜神社氏子による陸行列で神社に入り、神輿が神社に納められて終了となる。
- ・ このあと、阿太加夜神社では、1週間にわたり祈祷が行われる。



(2) 中日祭（5月22日）

意宇川の水上で五大地の權伝馬踊りが披露されたのち、五大地の乗員は出雲郷橋から車輪の付いた陸船に乗り換え、五番船の大海崎船を先頭に参道を踊りながら進んで阿太加夜神社へ向かい、神社にも踊りを奉納する。神社では、五穀豊穰などの祈念が行われる。

a) 阿太加夜神社での祭礼

- ・阿太加夜神社で神職らによる祭典が行われ、拝殿前で氏子青年団による「木遣り唄」が奉納される。

b) 意宇川での權伝馬踊り

- ・意宇川の出雲郷橋下には、權伝馬船団が待機しており、予定の時刻から權伝馬踊りが開始される。渡御祭と同じように披露され、川の両側と橋の上は見物人で埋め尽くされる。
- ・權伝馬踊りが終わると、五大地の船は着岸し、乗員が上陸する。



意宇川で權伝馬踊りの披露

c) 陸船行列

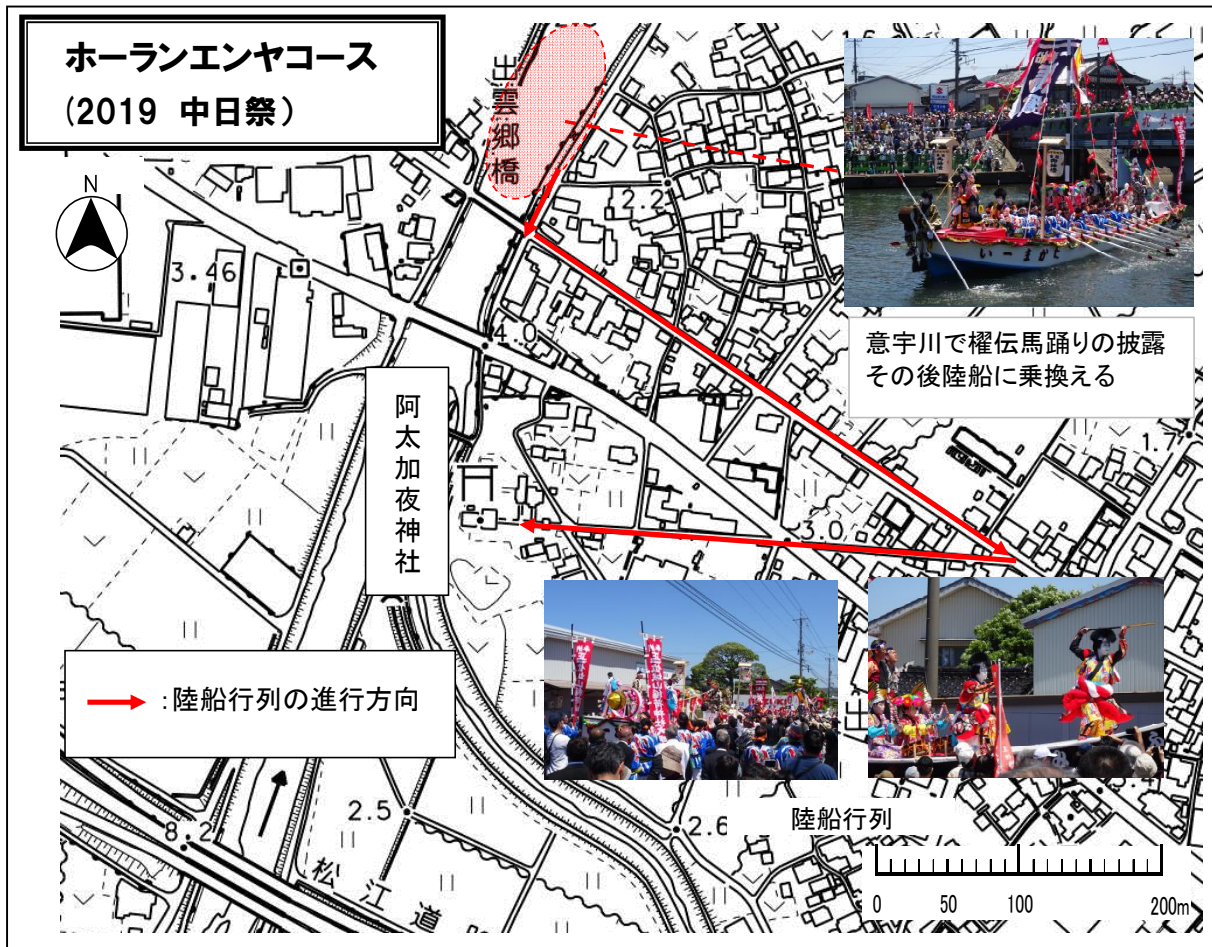
- ・出雲郷橋近くの「市の向地区」から權伝馬の陸船行列が出発する。
- ・五大地ごとに車輪のついた陸船の上で權伝馬踊りを披露しながら阿太加夜神社まで行列が行われる。このとき道路は身動きができないほどの見物客で埋め尽くされる。



意宇川から阿太加夜神社へ向かう陸船行列

d) 阿太加夜神社での權伝馬踊り奉納

- ・陸船が境内に設置され、踊りが準備される。このとき境内には入りきれないほどの見物客が詰めかける。
- ・陸船の上で五大地の權伝馬踊りが五番船の大海崎から順に奉納される。權かきたちは、船外で立って唄う。
- ・五大地の權伝馬踊りの衆が境内に集合して万歳三唱して終了する。



（3）^{かんぎよさい}還御祭（5月26日）

還御祭は、神輿が阿太加夜神社から城山稲荷神社へ還る神事で、^{とぎよさい}渡御祭と逆のコースで船団が帰って行く。渡御祭のときと同様に、^{いろうがわ}意宇川河口と大橋川で權伝馬踊りが披露される。

上陸して城山稲荷神社に着いたのちには、境内でそれぞれの^{ごだいち}五大地が納めの踊りを奉納して神事の全てを終了する。

a) ^{あだかや}阿太加夜神社での祭礼

- ・阿太加夜神社で神職らによる祭典が行われ、神輿行列が渡御祭と同じ道で^{あだかよぼし}出雲郷橋付近栈橋まで陸行列する。

b) ^{いろうがわ}意宇川、^{おおはしがわ}大橋川での權伝馬踊り

- ・神輿が神輿船に遷され、これまでと同様に、意宇川で權伝馬踊りが披露される。
- ・各船は船団を編成し、大橋川に向かう。
- ・大橋川では、基本的に渡御祭と同じことを逆方向に行う。
- ・神輿船が^{まかた}馬潟權伝馬船に曳かれて着岸し、上陸し、渡御祭と同じルートを再び陸行列して城山稲荷神社へ向かう。

c) 城山稲荷神社での祭礼

- ・神輿が神社に到着するとすぐに神霊が本殿に遷され、祭礼が始まる。
- ・五大地の衆が神社に到着し、最後の奉納踊りが行われる。
- ・社殿に向かって並び、^{まかた}馬潟、^{やだ}矢田、^{おおい}大井、^{ふくとみ}福富、^{おおみぎき}大海崎の順に、權伝馬踊りが演じられていく。
- ・奉納踊りが終わると、^{ごだいち}五大地の人々全員が社殿の前に出てきて、最後に一同で「ホーランエンヤ万歳」と三唱して拍手し、全日程が終了する。



^{あだかや}阿太加夜神社からの陸行列



城山稲荷神社で踊りの奉納

（4）ホーランエンヤ^{ごだいち}五大地

伝統的なホーランエンヤの^{かいでん ません}權伝馬船による神事を今も受け継いでいるのは、^{おおしがわ}大橋川下流域から^{なかうみ}中海沿岸に位置する^{まかた}馬潟、^{やだ}矢田、^{おおい}大井、^{ふくとみ}福富、^{おおみさき}大海崎の5つの地区である。

ホーランエンヤの準備は1年も前から始められる。10年のあいだを空けて行われるため、それぞれの地区では総出で前回の神事参加者から新しい参加者へと踊りや歌が伝授され、何度も練習が重ねられる。

また船の準備や飾り付け、沿岸の清掃に至るまで、5つの集落だけでなく、^{ひがしいずもちやう}東出雲町阿太加夜神社の氏子たちや、有志住民の協力によって行事が伝承されている。

一番船：^{まかた}馬潟

船体に「いの一^{いち}番」を示す「い一^{いち}まかた」と書かれ、船上には先端に金の^{ほうじゆ}宝珠の付いた^{ほうじゆぼしら}宝珠柱が1本立つ。「一番船 馬潟」とある紫の^{おおのぼり}大幡を掲げる。（ほかの4地区は赤の幡）。船の大きさは5地区のなかで最大。馬潟のみ「招待」（「まねき」とも呼ばれる）という^{はなぶさ}花笠をかぶって女子衣装をまとい観客に向かって笑顔を振りまく役があり、「^{けん}剣權」、「^{さい}采振り」、「^{たい}太鼓」とあわせた役をすべて少年がつとめるのも特徴。



^{まかた}馬潟權伝馬船



神幸之図概略（明治3年（1870））

二番船：^{やだ}矢田

^{ほうじゆぼしら}宝珠柱が2本あるのが伝統。前の柱には「二番船 矢田」の赤い^{のぼり}幟を掲げ^{いんぎ}稲荷の社紋旗を交差して立てる。後ろの柱には吹き流しの旗がつく。



^{やだ}矢田權伝馬船



神幸之図概略（明治3年（1870））

三番船：大井

宝珠柱は1本。赤い「大井」の幟を掲げる。船尾には小振りな宝珠柱に「三番船」の幟。大井は櫂さばきが自慢という。上がりきった櫂を素早く切り返して櫂面を垂直から水平にする「返し櫂」を行いながら漕ぐ。ときに櫂かきが仰向けになった「寝櫂」も行う。



おおいかいでんまぜん
大井権伝馬船



神幸之図概略（明治3年（1870））

四番船：福富

宝珠柱は1本で「福富」の赤い幟を掲げる。後方にもう1本、先端に矢車という風車状の飾りが付いた柱には吹き流しを付ける。両舷に日の丸をつけるのも特徴。



ふくとみかいでんまぜん
福富権伝馬船



神幸之図概略（明治3年（1870））

五番船：大海崎

宝珠柱は1本で吹き流しを付ける。舳先には「先頭船」の幟、船尾に「大海崎」の幟が立つ。五大地で先頭を切るのは大海崎である。大井と同様に櫂さばきを自慢としている。



おおみざきかいでんまぜん
大海崎権伝馬船



神幸之図概略（明治3年（1870））

4 まとめ

ホーランエンヤは五大地を中心とする人々の伝統を守る魂と誇りによって継承されているのは言うまでもないが、船の飾り、はんがゐ 剣ざいふり 櫓や采振、かいかた 櫓方の衣装、櫓の一本に至るまで松江の伝統技術が息づいている。ホーランエンヤの風景は、市民が松江の伝統の素晴らしさに触れ、また松江を「水の都」であると再認識し、誇りに思う一場面である。水都松江にふさわしい風情である。

歴史的風致のエリア図

ホーランエンヤに見られる歴史的風致

